# 外交極秘解除文書 連載⑩

## 「冷戦後の世界」に臨む日本外交の挑戦

## 湾岸危機 人質解放をめぐる攻防（下）

### ――「シニア・ステーツマン」中曽根の面目躍如

帝京大学専任講師
**山口 航**
やまぐち わたる 同志社大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（政治学）。専門は日米関係史、安全保障論。著書に『冷戦終焉期の日米関係 分化する総合安全保障』など。

湾岸危機の折、イラクに渡った中曽根元首相一行は、一九九〇年一一月四日、フセイン大統領などと相まみえ、武力衝突の回避、すべての外国人人質（うち日本人二一三人）の速やかな解放などを求めた。交渉は緊張感に満ちており、随行した佐藤孝行衆議院議員が「日本は第二次大戦の経験、世界でゆい〔唯――筆者補足（以下同）〕一のひ〔被〕爆国としての経験から戦争の無益さを知っている」と訴えると、フセインが「〔それは〕どこの国の原爆か」とやり返す場面もあった。

中曽根は「米国人というのはいったんカッとなると前後の見境がつかなくなるという性質ももっている」と語り、「米国に対して戦争を思いとどまらせる努力をすることが大切である。自分は、個人的にアメリカ人が好きであるが、彼らがフランクなところはいいのだが、時としてティーンエージャーみたいなところがあるのは困りものである」と述べた。その時、「フセイン大統領にわらい」が起きた。

そこで中曽根は「もう少しお話することが可能でしょうか」とたたみかける。するとフセインは、中曽根と通訳の外務事務官のみを奥の別室に案内した。かくして一時間にわたって、余人を交えず話し合いがもたれることになった。

「会談のやりとりはメモの形で残さないように」――会談後、中曽根は通訳にこう指示した。だが外務省側は、通訳のメモに基づく文書を残しており、それが「極めてしん〔慎〕重な取り扱い」を要する記録として、本省に送られていたのである。

## 外務省の想定より踏み込んだ中曽根発言

この会談で中曽根は、「自分は、クウェイトの問題については、貴国に同情すべき点も多々あると思う。この地域の国境問題は、日本やヨーロッパ諸国のようなNATION STATE〔国民国家〕とはその性格が違うと思う。即ち、この地域の国境は、さばく〔砂漠〕のうえに勝手に線を引いたものに過ぎないからである」と述べた。この発言について、後に中曽根は「相手に対して同情的な発言をしているわけだ。多少は人質を取り返すために色をつけ、帰したい一心もあった」と解説している（『中曽根康弘が語る戦後日本外交』）。

それに対してフセインは、「一言確認申し上げたいことは、〔イラクが侵攻した〕本年の八月二日以前には、イラクとクウェイト間の国境は全く定まっていなかったという事実である」と応じた。中曽根は、「クウェイトがイラクの石油をとうくつ〔盗掘〕したという話も本当のことでしょうね」と合いの手を入れる。

ここが勝負所とみた中曽根は「ストライク・ゾーン」すれすれを攻めた。「クウェイトのジャービル政権は、国民の間で非常に不人気であったと思う。自分も以前、ジャービル首長にあった経験では、大変ごうまん〔傲慢〕な印象を受けた。……そこで、もしイラクが、クウェイトから完全に、あるいは部分的にでも撤退をし、クウェイトにおいてレファンダム・国民投票を実施すれば、クウェイト国民が果たしてジャービル首長の帰国を望んでいるかどうかはっきりするわけであり……結局のところ、イラクが望む結果を得られるのではないかと思う」。

会談に備えて外務省が事前にまとめた留意点には、「正統政府の復帰を阻害するような提案（正統政府の復帰前のクウェイトにおける選挙等）を承認するような発言」を控えるべしと記載されている。中曽根の発言は、こうした方針に抵触しかねず、職業外交官ではないからこそできるものであった。

踏み込んだ話し合いがなされたものの、この場で人質解放の言質は取れなかった。それでも、日本人全員を解放する決裁書がイラク大統領府に上げられた。人質の全員解放

には議会の決議が必要だが、一部の解放ならばフセインの決裁が最終手続きであった。判断はフセインの胸三寸にあったのである。

## 同行団の焦燥とアメリカの疑心暗鬼

だがイラク側の結論は一向に日本側に伝わってこなかった。そのため、外務省の記録によると、「元総理御自身はさておき」、同行した議員からは「期待はずれとしょうそう〔焦燥〕感」が表面化してきた。「何人出すということはまだ言ってこないのか」「人質との面会は出来ないのか」、さらには「本音まる出しでジャンボ機を用意してきて選挙民の手前手ぶらでは帰れないと大きな声でもらす」こともあったという。

帰国前日の一一月六日の朝、ようやく七〇人の解放が決定された。ラマダン第一副首相は、「今回の決定に至った理由は、先ず何よりもわれわれのナカソネ（ママ）閣下に対する高い評価」であると説明している。

だが、中曽根はこれに満足をしなかった。「出来るならば、人道的見地から日本人以外のゲストについても、数名で結構であるので、その解放をお願い出来ないであろうか。というのも、自分が今回日本人だけを連れて帰ったならば、人はみな、自分のことを利こ〔己〕主義と見なすかも知れないからである」とイラク側に依頼し、ふたたびフセインにも面会している。湾岸危機の平和的解決に向けて引き続き努力をすべく、「これから自分が国際場り〔裏〕で行動していく上で、自分は決して利こ主義ではないということを示すことがぜ〔是〕非とも必要だ」ったのである。

一方で中曽根の行動については、同盟国アメリカから抜け駆けとの批判もあった。国務省のゼーリック顧問は小和田恆外務審議官に対し、欧州の友人の話として「欧州各国も同様の問題をかかえつつもしん〔慎〕重な対応を維持するべく努力をしているところナカソネ・イラク訪問は各国の足なみを乱すことにつながりかねないと懸念していた」ことを引き合いに出している。

さらに疑心暗鬼が生じた。国連平和協力法案を廃案にする代わりに、人質を解放してもらうという取引が、日本とイラク両政府間でなされたのではないか、との臆測も出てきたのである。例えば、スコウクロフト大統領補佐官は小和田に「これはさ〔些〕細なこと（ＳＭＡＬＬ ＴＨＩＮＧ）であり、かつ事情の分かった者は即ざ〔座〕に否定できることだが、サダム・フセインをゆう〔勇〕気づき（ママ）、時は自分に見方（ママ）していると思い込ませることになる

のは気になるところである。また、米議会がこれを聞けば必ず問題を提起するであろう」と注意を促している。

## 現代外交における政治家の役割

結局、このとき日本人以外の解放はかなわなかったものの、七四人が解放され、翌月にはすべての人質が解放されることになった。中曽根はその後、カーター元米国大統領やブラント元西独首相などとともに戦争回避の道を探り、和平試案をフセインに託したが、翌年一月に多国籍軍がイラク軍に対して空爆を開始した（なお、中曽根はその後自民党復党を果たしている）。

1990年11月4日、バグダッド市内の大統領府でイラクのフセイン大統領（右）と人質解放を求めて会談する中曽根康弘元首相（AFP=時事）

片倉邦雄駐イラク大使は中曽根のイラク訪問について、「イラク側の一行かん〔歓〕待振りは、フセイン大統領との五回にわたる会談、ラマダン第一副首相始め主要閣僚との会談、政府迎賓館の使用、一行全員の滞在費負担と、あたかも政府賓客なみの扱いであった」と総括している。さらに、中曽根は「原則論をくりかえしつつも」「一見イラク側の事情も理解しているかのようなし〔姿〕勢を示して言わば相手のふところに深く飛び込んで」「国際政治にじゅく〔熟〕練した『シニアー・ステーツマン』の面目やく〔躍〕如のところがあった」と片倉は評価した。

かつて英国の外交官ニコルソンは、職業外交官以外による「素人」の外交を批判した。外交の「素人」たる政治家は「公衆の期待を惹き起し、誤解に導き、混乱を生み出しやすいからである」（H・ニコルソン『外交』東京大学出版会、一九六八年）。金丸信元副総理が訪朝した際、まさしく、こうした批判を受けた。だが、今日、各種首脳会談や国際会議など、もはや「素人」抜きの外交は成り立たない。中曽根のイラク訪問からは、現代における「素人」外交の一つの姿が浮かび上がってくる。●